福澤諭吉と排耶蘇教問題

中　村　　聡

はじめに

排耶思想にも、立場や宗教観によってさまざまな考えかたがある。これは、浄土真宗を始めとする仏教側の排耶思想だけを探るものではない。プロテスタントの侵攻と真宗の排耶思想を当事者だけでなく、一般民衆がどのようにとらえていたのかという社会の目からも見てみたい。それは、当時の日本の社会情勢を知ることにもなるだろう。また、当時の文化人の代表格である福澤諭吉がキリスト教にどのような反応を示したかを知ることによって、当時の知識人がキリスト教問題にどのような対処をしていったのかを理解する手立てにもしていきたい。これらを総合した形で、幕末から明治初期の日本社会の一面に光を当ててみようと試みるものである。

1．風刺雑誌にまで登場する宗教時事問題

日本の近代史の中で、宗教論争が世間を騒がせたのは1880（明治13）年前後のことであった。禁教令から開放されて布教を拡大しようとするキリスト教と、「護法・護国」の御旗を振りかざしてこれを防ごうとする浄土真宗を中心とした仏教勢が、日本全国を土俵として激しく争ったのである。この時期には有名な日本独自の排耶書も著され、論理的に排耶蘇を唱えている仏教僧も居たわけだが、世間を騒がせていたのは、

そのような高尚な宗教論ではなかった。町の中で行われる両派の演説会と、それを面白おかしく報道する当時のマスコミ＝新聞記事に沸き立っていたのである。仏教勢力とキリスト教勢力の具体的争いは、演説会における相手方の批判、誹謗であった。それを新聞や雑誌が取り上げ、さらに紙面でも批判の応酬が繰り広げられていった。演説会に参加した仏教僧やキリスト教関係者の論戦はいよいよヒートアップしていくが、社会は意外に冷淡で、「耶蘇」「排耶」を社会的流行もの程度に考え、一種の娯楽として受け止めていた様子がうかがえる。

この宗教論争というトレンドの中心に居た一人が佐田介石という西本願寺派の僧侶であった。介石は須弥山説と独自の経済論を掲げ、舶来品排斥、国産品愛用を全国各地で演説してまわった。舶来品排斥論は、外来の物品をすべて排除すべしとの考え方で、この排撃の対象の範疇には外教であるキリスト教も含まれる。すなわち介石にとっては、舶来品排斥運動と排耶運動とは一体をなすものであった。舶来品排斥運動に合わせてキリスト教批判の演説会も頻繁に催され、一般民衆にも分かりやすい排耶書も流布されるなど、直接の排耶運動もどんどんと拡大していく。

佐田介石の舶来品排斥運動、排耶蘇運動はそれ以前からもかなり有名で、その動向はしばしば新聞に報じられるほどであった。しかし、その舌鋒が先鋭化し、社会にも大きな影響を与えるようになったのは、彼が京都に現れた時期であったといえよう。谷川穣氏の調査によれば、介石が京都を中心に活動し始めたのは1880（明治13）年の８月頃で、翌年の明治14年の同次期にかけて、京都で22回、大阪で６回、滋賀で１回と主に近畿圏での演説会を行っている。この間の東京での演説会はわずか２回だけである[1]。介石の京都出現で舶来品排斥、排耶運動の流行は大いに盛り上がり、キリスト教側の布教演説会も、仏教側のキリスト教批判

演説会も熱狂の一途をたどり、拡大していった。このような状況の下で問題が広がった。事態は佐田介石対キリスト教という単純な図式で論争が終わらなくなってきたのである。佐田介石を中心とした杞憂会、福澤諭吉を中心とする交詢社が過激な駁耶演説会を催すようになったのである[2]。一方のキリスト教側の代弁者となったのは同志社であった。さらに日本各地に排耶結社が生まれ、その地方にやってきたキリスト教徒の活動を妨害していた。

京都に『我楽多珍報』という滑稽雑誌があった。1879（明治12）年から1883（明治16）年までの５年間という短い発行期間であったが、当時の世間を覚めた目で面白おかしく評している。『我楽多珍報』が俎上に挙げた人々は多種多様であるが、およそ次のような分類に分けられよう。①中央と地方の政治家、②開化の社会と風俗に翻弄される人々、③宗教者、である。京都という土地柄、政治家と社会風俗の二大テーマに加えて宗教者の一群が顔を出すのである。いうまでも無く、京都には仏教各宗派の本山が集中し、大小の神社仏閣が遍在する。おまけにキリスト教主義の学校・同志社までもが創立されるという一種の宗教都市である。同志社は1880（明治13）年９月に第１回の学術演説会を開催し、以後毎月のように開催されていく[3]。そのような折、元西本願寺の僧侶であった佐田介石が京都に戻ってきて洋品排斥の六益社を結成したり、杞憂会や交詢社が駁耶演説会を開催するなど、反キリスト教の動きが活発になる。『我楽多珍報』の有力同人には神官と僧侶が揃っている。道具立てにはこまらない。じつに神官、宣教師、東西本願寺といった宗教者は、笑いを武器とする『我楽多珍報』が俎上に挙げる格好のタネとなっていった。次にいくつかの例を見てみたい。（カッコ内の数字は『我楽多珍報』の号数を示し、その後に作者名を記す）

まず、神官については、

・神主は無学文盲（102 淇上醒史）

・氏子も蒙昧な御幣担ぎ（10 土岐生）

・キリスト教徒は「西洋の狐付」だが、稲荷の遷宮に浮かれる氏子たちは「日本の狐付」だそうな（112 奇井太造）

・仏教多虚妄、神道似荒唐（64 一々庵百一）

などの記事が見える。キリスト教を批判する稲荷神社の氏子たちも盲目的な信仰で、日本と西洋との違いに過ぎないとされる。どうやら、神官や神道は無知蒙昧のイメージで扱われているようである。また、肉食妻帯の自由を手に入れ、色欲におぼれる僧侶に対する目も厳しい。

・往々淫風ニ流レ、泥水ニ浮カレ、其ノ醜行見ルニ忍ビザルモノアル（67 石井一蛙、99 敲門瓦子）

仏教僧の中で、『我楽多珍報』が狂画や読み物で執拗に突いたのは、西本願寺門主一族の不品行のネタであった。その舌鋒の鋭さゆえに讒謗律5条に抵触し、当時の編輯長が罰金処分となり、7円の罰金を支払うという事件まで起きてしまった。それでも、記者の筆は止まらない。

・法談は嘘八百（19 朝柄要太郎）

・そのお経は阿呆陀羅経（69 石井一蛙）

・お説教に涙をながす門徒は有難連で後家婆々（74 酢荷担遊人）

・虎の子のへそくりを差し出したとて、はたして極楽往生が出来るのかい（96 上田花月）

・小さな寺院はキリスト教の攻勢で米櫃はからっぽ、住職は賽銭箱を浚えねば年を越せないとなげいている（84 94 仏々優人）

・キリスト教が仏教を脅かすとはいうものの、世間を見わたしてみると、真実ありそうもないものだねぇ（77 土岐生[4]）

これらの悪口雑言、言いたい放題の記事をものしたのは自身もまた宗教関係者である記者であった。換言すれば、キリスト教の広がりに戦々恐々

とする神官や仏教僧の排耶運動も一枚看板ではなかったのだということができるであろう。暴走する駁耶運動に疑問を感じ、内部告発的な記事によって抑止力を働かせた宗教者も居たことを忘れてはいけない。

2．排耶論の転換期

滑稽雑誌や一般民衆にまで笑いものとされた排耶論とその活動家たちであるが、その内容は一通りのものではない。キリスト教が及んだ地域の文化的差異もあるであろうし、排耶を唱える人々の意識もまた異なっていた。一番にキリスト教と対峙した真宗の排耶論でさえ、時代と対抗するキリスト教の内容によって排耶論の中身が変遷している。

幕末には十数種を超える多くの排耶書が執筆、刊行されたが、その代表格といえるものは水戸藩によって翻刻・刊行された『破邪集』(1855安政２年）と杞憂道人によって1861（文久元）年に作られた『闢邪管見録』と『翻刻闢邪集』である。

『破邪集』は明の徐昌治が1639（崇禎12＝寛永16）年、当時の明国内の儒者および僧侶等の排耶論を集めて編集した『聖朝破邪集』を、水戸藩主斉昭が国友尚克らに命じて翻刻させた排耶論集で、全８巻からなる。斉昭によれば、従来耶蘇教関係の書物といえば、排耶書も含めてすべて絶版処分になっていたため、今日切支丹といえば魔法のように考えたり、また邪教に非ずなどと言うものもあり、邪教の大害を知らないものも多くなっている。したがって邪教排斥の書を世にひろめ、その大害を一般に知らしめようとしたことにあった。水戸藩は幕府の許可を得て直ちに翻刻に着手し、1856（安政３）年12月に梓行を終えた。『破邪集』は須原屋を通じて広く一般にも販売された。また、それと同時に朝廷・幕府･廷臣･諸侯および民間有志の者や諸寺院へも多数献本されていた。それだけに、その内容はいち早く多くの幕末排耶書に取り入れられ、さ

らに広く知られるようになった。

『闢邪管見録』は杞憂道人こと養鷗徹定が「伴天連追放文」「慶長禁条」をはじめ「退治邪宗論」「暦象編」など江戸幕府のキリシタン禁令や耶蘇文献22編とともに、許大受の『聖朝佐闢』や朱筠の『四庫全書総目』など、明代・清代の排耶書11編を抄録したもので、上下2巻からなっている。また『翻刻闢邪集』は、同じく養鷗徹定が翻刻して、同じ1861（文久元）年に刊行した排耶論集である。鍾始聲の『天学初徴』『天学再徴』をはじめ劉文龍の『統正序』や釈費隠の『原道闢邪説』など明代の排耶論八篇を集録したものである。

こうした二大権威による排耶書の刊行の意義は、第一に開国以来キリスト教の蔓延に警戒を示しつつも、キリスト教禁制下ゆえにその情報が乏しく、またそれがキリスト教排撃のためではあったもののキリスト教を口に出すことができなかった僧侶たちを勇気付けたことにあった。そして第二には、翻刻排耶書を通じて、ただ単に僧侶たちがキリスト教の「邪教」たる所以を学んだことである。そしてただ学んだだけでなく、その興奮と危機意識の覚めやらぬうちに、彼らをして自ら翻刻書を援用して、より多くの者にもキリスト教への警戒心を喚起させるべく筆を取らせたことである。

しかし、このことは換言するならば、江戸末期の破邪僧たちが現に直面しているさまざまな問題、即ち危機意識に対する何らかの解決策を中国の排耶書の中に見出そうとした姿勢を表示したものであると捉えることができるであろう。彼らはなぜ、どのような点において、二百数十年前に書かれた中国排耶書を当面する状況の打開の模範理論として注目したのであろうか。

第一は、日本の破邪僧たちが幕末におけるキリスト教と、二百数十年前の排邪の対象となったキリスト教は異なるものではないとする認識を

持っていたことが挙げられよう。明末のキリスト教も、幕末のキリスト教も、「耶蘇ノ教」であることには変わりは無い。こうした理解が、模範理論として明末排耶書に範を求めさせた理由の第一だったのだと考えられる。

第二は、幕末の破邪僧たちに、明末清初の排耶活動の歴史や、徳川幕府初期の厳しいキリシタン禁教政策の歴史を振り返ることで、過去の排耶活動の成功例と禁教に至る筋道を確認しようという歴史認識があったことが挙げられる。西洋の邪教が当方に伝来したのは、和漢同時であるという視座を据えた。これは、中国と日本にほぼ同時に伝来したキリスト教は、ほぼ同時にそれぞれの政府の厳しい禁教政策によって徹底的に弾圧されていることを理解させようという手法である。同時に明末における強権的な禁教政策の効力を、日本の歴史の文脈に位置づけながら理解しようとする歴史意識のあらわれととることができるだろう。この歴史意識と第一に挙げたキリスト教認識が重なり合い、幕末のキリスト教排斥に際しても、明末期の排耶書の有効性が見て取れる。これが、邪教批判の模範理論として注目されたのであろう。

第三は、幕末の破邪僧たちが明末の闢邪運動成功の一因に、僧侶と儒者が一致してキリスト教排撃に対処していたことを看取り、日本においては神儒仏の三教が一致して共通の敵であるキリスト教に対抗することの意義を見たことがある。

第四は、各幕末排耶書が、そもそもキリスト教が「邪教」とされるのはなぜか、「邪教の大義」とは何かを説明する際、一つひとつの典拠文献を明示することができるからである。この考証主義は、排仏論者に対して排耶論拠がけっして僧侶の空論ではないことを示す便法であるとともに、無学蒙昧な僧侶たちへの道標という二つの意味をこめた配慮だといえるだろう。幕末の排耶書には中国の排耶論を模範理論とし、引用に

際して典拠を示しながら、日本のキリスト教もまた「邪教」であることを再確認しようとする姿勢が示された。この方法は、直接宣教師やキリスト教書に接することのできない僧侶たちによる、精一杯の排耶論法であったにちがいない。しかし、この時すでに新たな視角による排耶活動も進められており、模範理論として中国排耶論を用いることの限界も告げられていた[6]。

1840（道光20）年、清がアヘン戦争に敗れて以後、南京条約等の不平等条約の下、多くのプロテスタント宣教師が中国に入り、多くのキリスト教布教書や漢訳西洋科学書が彼らの手によって成立した。これらの書は中国の沿岸部で出版されると、間をおかずに長崎に舶載された。蕃書調所では、これらの中から有用な著作を選び、キリスト教に関係のある部分を削りながら和刻本を作成していった。しかし、正確にキリスト教関係部分を削ることもままならず、中国出版本が日本の知識人の手に渡るということもしばしば出来した。

また、宣教師たちの著作ばかりでなく、中国から宣教師が直接日本に渡来することも増えていった。1859（安政６）年以降、リギンズ[7]、ウィリアムス[8]、フルベッキ[9]、ヘボン[10]らの各派宣教師、医療宣教師たちが来日し、長崎や横浜を拠点に伝道活動の準備を行っていた。彼らは日本人が漢訳西洋科学書やキリスト教書を求めていることを知ると、中国在留宣教師の著した書物をさまざまな形で販売、配布していった。こうした外国人宣教師たちの行動をすばやく察知した原口針水（真宗本願寺派）が、長崎に居たウィリアムスを訪ね、キリスト教に関する漢籍を借り、問答対話を行ったことはすでによく知られている。

キリスト教書が入手され、仏教徒の立場で『聖書（新旧約）』『天道溯原』などに記載されている内容が逐一検討されるようになると、自ずと従来のキリスト教批判の方法に対する再検討が叫ばれるようになった。

ここに「古ヘノ天主教」と「今ノヤソ教」との違いを踏まえた新しい排耶思想の研究が始まったのである。「今ノヤソ教」は何に基づいて邪を決するのか。中国の模範理論に限界を見た排耶側の人々が新たに提唱した方法は、直接新旧約聖書に基づいて邪を決することであった。『聖書』そのものに当たって、天地創造における「上帝真神」の所業を難じ、イエスの復活に関して不合理を指摘する。ここに防御の基本が定められたのである。ただし、こうした仏教者流の合理主義を徹底させていくならば、自らの須弥山説や西方浄土の存在なども合理的に検討されなければならなくなるだろう。しかし、そのことには触れられなかった。破邪顕正が目的である以上、自説の批判的検討は不問だからである。

開国、欧米人の来航と同時に彼らの宗教であるキリスト教の侵攻に脅威を感じた仏教徒は、キリスト教に対抗すべく護法活動を開始した。その活動論理の基本は護法即護国論である。彼らはこの論理によって破邪顕正運動をすすめ、排耶書を著して廃仏論の不当性を唱えるとともに、神儒仏が三教一致してキリスト教に対抗することを訴えた。

仏教徒たちが具体的にキリスト教を論破するために準備した理論は、主として明末清初の儒者、僧侶の議論であった。禁書政策のため、国内には信用に足りるキリスト教批判の書物が乏しかったからである。彼らが明末の理論を導入しようとした姿勢は決して特異なものではない。当時の儒者の先端理論が明末理論の展開であったことを見るならば、きわめて当然のことであった。

しかし、もはや17世紀の排耶論によって学びうる事態ではなくなっていた。新たなるキリスト教＝プロテスタント（耶蘇教）との接触は、仏教徒たちにも新たな対応のしかたを迫ることになった。キリスト教宣教師に接触することができる僧侶はさかんにキリスト教書を収集し、新たなキリスト教批判の視座を示した。明末の天主教と幕末の耶蘇教との差

異を剔出した彼らは、明末の排耶論を模範理論とすることの限界を見出し、代わって直接『聖書』の内容を道理の立場で批評する方法を提唱したのである。

3．福澤諭吉の排耶論

1880（明治13）年が排耶運動の頂点だったと考えられ、駁耶演説会が頻繁に開催されていった。この演説会は仏教の僧侶、とくに真宗の僧侶が中心ではあったが、結社として演説会に参加したのが交詢社であった。交詢社はこの年、福澤諭吉が提唱し、結成された我が国最初の実業家社交クラブである。名称は「知識ヲ交換シ世務ヲ諮詢スル」に由来する。慶應義塾の同窓会メンバーを中心として１月25日に青松寺（東京芝区愛宕下）で発会式が行われた。私擬憲法案を発表したことでも知られる交詢社であるが、この交詢社が京都において積極的に駁耶演説を行っていた。

1881（明治14）年６月14日、新京極四条上ルの金蓮寺で交詢社員学術大演説会が開かれた。この演説会には関西在住の社員の他に、福澤諭吉自身が派遣した直接の門下生、波多野承五郎・高木喜一郎・高島金吾が参加した。それぞれの論題は波多野が「人ヲ以テ結合スベキヲ論ズ」、高木は「外教論」、高島は「文明諸国猶且ツ国教ノアルアリ」というものであった。1200名ほどが参集した会場には真宗の僧侶が多く、弁士はキリスト教徒を国賊と断言し、同志社関係者を強く刺激した[11]。なぜ福澤と関係の深い交詢社がこのような駁耶演説を行ったのであろうか。内情を調べていくと、なかなかに面白いことが分かる。じつはこの時期の慶應義塾は財政難に陥っていた。これを背景として80年の秋、冬の頃から東本願寺と急接近していった。それは、明治会堂への東本願寺の加入に始まっていると思われる[12]。同年11月26日には東本願寺を明治会堂社

中に参加させるかについて意見を述べている。

「本願寺之性質ハ、我輩之社中ニ於而も全く無毒之もの歟とも被思、又一方論すれば、本願寺ハ常ニ貧乏山師之蟻附する所、我社中も其山師ト同一視せられ而ハ、少しく迷惑と申場合もあり[13]。」

この書簡を見るかぎり、本願寺之僧侶は「貧乏山師」となり、福澤は本願寺への崇敬や特別な心情を抱いていたわけではないように思える。それにもかかわらず、福澤グループは東本願寺の会計整理や外教防御を旗印に掲げた東本願寺の貸付会社「真利宝会」の設立などに関わっている[14]。さらに、愛知県の東本願寺末寺を舞台とするロシア正教との裁判沙汰[15]、これに伴う門人の駁耶演説会への派遣[16]など、福澤グループは約1年をかけて東本願寺に貸しをつくっていった。

これに対して、本願寺側も81（明治14）年6月24日の明治会堂での東本願寺仏教講演会の成功によって、門主親子が福澤のもとに挨拶に行くほど信頼を表明する[17]。さらに81年7月に開業した明治生命保険の発起人には東本願寺の渥美契縁が福澤グループとともに名を連ねる[18]。京都での交詢社の駁耶演説会は、この両者の密接な関係の中から生まれたものであった。

しかしながら、前述したように福澤は仏教の教義と僧侶の堕落に対しては批判的な立場をとっていた。

「同時に肉食妻帯免許の令あり。僧侶は此命令を拝承して如何の感をなしたるや。（中略）我輩固より教法の理を知らざれば、亦固より其肉食妻帯を咎むるには非ざれども、唯僧侶の不見識に驚て仏法の為に之を悲しむのみ。（中略）僧侶の輩は維新の初に於て廃仏の風声鶴唳に驚き、今日に至るまで、放心したる者の如くにして、唯政府に依頼し世間に阿らんとして、遂に仏門を俗了するに至りしは誠に嘆息に堪へず。（中略）花柳に戯れ酒色に耽り醜行見るに堪へず[19]。」

肉食妻帯を許可する令が出たが、僧侶たちはこの命令を受けてどのように感じているのか。私は仏教の教理を知らないし、また僧侶の肉食妻帯を咎めるつもりはないが、ただ僧侶の見識のなさに驚き、仏法のためにこれを悲しむだけである。僧侶は維新の初めに廃仏という事態に驚き、今日まで放心状態の者が多く、政府に依頼したり世間に阿ろうとして、仏門まで俗了するまでに至っている現状はまったく嘆息に堪えない、とまで言っている。それでも、複雑に、外敵であるキリスト教に対抗するべきは仏教であるとする。

「宗教の真偽正邪は我輩これを知らず。之を知るも論ずるを好まず、唯経世の一点より観察を下して、外教の蔓延は之を防がざる可からず、之を防がんとして固より政府に依る可からず、獨り学者に頼む可からず、又これに依頼す可き事柄に非ず、外教を防ぐには内教を以てせざる可からず、内国固有の宗教は仏教なり、仏法を以て耶蘇教を防ぐ可しとは我輩の持論にして[20]…」

宗教に関して、政治、学者が口出しすること、またそれを期待すること自体が筋違いである。外教キリスト教を防ぐのは、内教である仏教ではないのか。

そもそも福澤諭吉はなぜキリスト教に反対の姿勢をとるのだろうか。福澤の排耶思想の根本とは何なのだろうか。前に述べた愛知県岡崎の真宗対ロシア正教の争いに端を発した駁耶宣伝に派遣された福澤の門人矢田績の私家版著作の中に、事件のあらましと、福澤の指令が残されている。

「岡崎に内藤魯一と云ふ當時此地方の自由黨の首領で此人の一派が耶蘇教を信じ耶蘇教の宣傳をするので此地方に追々と耶蘇教の勢力が殖へて参りましたところが此耶蘇信者の中の一人が死亡して東本願寺の末寺の境内で耶蘇の式を以て葬式をやったと云ふ問題が起こった。東

本願寺にとっては由々敷き大問題で寺内で耶蘇の式で葬式するのは日本の宗教を侮辱するものである。これはどうしても、なんとかして今の中に外教を退治せんけりやならんと東本願寺の坊さんが福澤先生のところへ相談に來た、是非書生を二三人東海道へ派遣して外教の退治をやって貰ひたいと云ふことを先生に申込んだ其坊さんは渥美契縁と云ふ名僧で東本願寺の執行か何かやって居った坊さんです先生は之れを聞かれてそれは怪しからん宜しい御依頼通り外教を追拂ってやりませうと云ふことで三人の書生を派遣することになりましたその一人に私も加へられました[21]」

いくら地方の有力者とはいうものの、本願寺の末寺でキリスト教（ロシア正教）の葬式を執り行ったとはえらく乱暴な話であるが、これが裁判沙汰に発展してしまう。これを機会にキリスト教の無道理を広め、駁耶演説を行おうというのが東本願寺の代表である渥美契縁の計画であろう。それを福澤に持ちかけ、福澤が自分にもっとも近い所に居た矢田ら三人を派遣したのである。しかし矢田はこの当時22歳で、何をどのように演説したらよいのか分かっていなかった。そこで、福澤自身に率直に尋ねたのである。そして福澤は矢田に対して知恵を授ける。

「東京出發前私は福澤先生にどう云ふ意味の演説をしたらよいでせうかとお尋ねをしましたところ先生はこう云ふ風の意味のことを云へ政府と云ふものはどこの國にもある。即ちフイジカルガバーメントだ、フイジカルガバーメントはどの國にもある、宗教はメンタル即ち精神を支配する政府である、物質的政府を他の國から支配せんとすれば必ずや、國論沸騰して外國に對して大に攻撃を加へるであらう、外國の宗教が入ってきて、日本のメンタルガバメントを破壊しに來たならば矢張り我々日本人として黙って居れないのである。何んとしても黙視することは出来ない、こう云ふ意味で演説をせよと教へてくれました

ので、こいつは、うまひことを教ったと、私はそれに骨や肉を付けてやった[22]」

外来勢力によって一国の表面的な、物質的な政府＝フィジカルガバメントが支配されるとなれば、国内では国論が沸騰して反対運動が起こる。宗教はメンタルガバメントである。これが外来勢力に侵されるとなれば、フィジカルガバメントの場合と同じような反撃をしなければならない。だから、外来のキリスト教には反対しなければならないのである。

矢田は昭和になってから福澤の言説を追憶したわけであるが、彼の記憶は殆ど間違っていなかったようである。矢田の記憶にある福澤の考え方は、実は福澤自身が文字に残していたのである。それが『時事小言』に見える。ここから福澤の宗教観と排耶思想を見ていこう。

「幸にして我国の人民は祖先以降日本の人民にして自ら自国を保護し、社会の上流より下流に至るまで、よく内外の分別を弁じて、特にこの一点に就て頴敏なるは、畢竟先人の遺徳にして、我輩今日の人民は余慶を蒙るものなり。」

日本の人民は、上から下まで代々先人の遺徳を受け継ぎ、いろいろな事象について、それが国内のものなのか国外のものなのかを分別して、自国の伝統を守ってきた。しかし、禁教令が廃止されて以降、キリスト教が広まりつつある。しかし、日本国民は日本国民たる気力を保っていかなければならない。

「外教の蔓延を防ぐ」

ことを第一に考えなければならない。だが、その前に宗教についての自分の見解を述べておきたい。

「我輩は爰(ここ)に宗教の事を談ずると雖ども、その教の正邪真偽を弁ずるに非ず。唯その布教に由て人民政治上の如何なる影響を及ぼすものなるかを明らかにせんと欲するのみ。抑(そもそ)も宗旨道徳の教には、真もあら

ん、偽もあらん、真者より見れば偽者は偽なり、偽者より見れば真者も亦偽なり。銘々勝手に之を論じて可なり。」

宗教のことを語ろうとしているわけだが、その宗教の正邪真偽を論ずるのではない。ただその宗教が布教されたときに政治にどのような影響を及ぼすことになるのかということを明らかにしたいだけなのである。そもそも宗教には真もあるだろうし、偽もあるだろう。どちら側から見るかによって、その真偽が定まる。それは各々勝手に論ずればよい。自分の宗教観を述べておこう。

「記者の如きはこの辺に於て甚だ淡泊なる者にして、幼年のときより神仏を信ぜず、神社仏閣に至て腰を屈したることなし。又近年は西洋耶蘇教の噂もあれども、固より之を信ぜず。如何なる由縁にや、家の宗旨は日本普通、先祖代々より仏法なるが故に、家に死者あれば之を旦那寺に葬り、父母祖先の命日に墓参して香花を手向け、盆暮に墓所の掃除して寺僧に読経を依頼するのみ。是れとても、その亡父母祖先の霊が極楽に在るが故にその冥福を祈るの趣意にも非ず、地獄に在るが故にその苦痛を救わんとするの趣意にも非ず。況や我身の死後に於てをや。地獄も極楽も全く望む所の者なし。実に宗教の一事に就ては、何等の主義もなくして、唯累代日本の士族流に随て普通の習慣に任ずるのみなれば、爰に宗教の事を論ずればとて、仏法の友にも非ず、耶蘇の友にも非ず、去ればとて亦その敵にも非ざるが故に、双方共に安堵せられんことを願う。」

子供の頃から神社仏閣で拝んだようなこともないし、近年はやっているキリスト教も信じてはいない。先祖代々が仏教信者なので、葬式があれば寺に葬るし、父母の命日には墓参りをしに行って、僧侶に読経を頼む。ただし、それは父母があの世で救われんがためにやっているわけではない。自分が死んでも地獄も極楽も関係ないと思っている。ただ士族の習

慣に随っているだけだ。仏教の味方でもないし、キリスト教の味方でもないので、どちら側も安心してほしい。ではなぜキリスト教が広がることを防ごうとしているのか。

「我国人は開国以来、西洋諸国の人を師として之れに学び、又その著書を読てその国を師と為し、孜々勉強して及ばざるもの丶如し。誠に祝すべき事にして、我輩は益これを奨励し、之を学て遺す所なからんを欲する者なり。然りと雖ども、今日まで学び得たるものは、百工、技芸、法律、経世等の諸科にして、畢竟形体の事より外ならず。即ち西洋人は吾人の師なり、その国は我国の師なりと雖ども、その師たるや形体の師にして精神の師に非ず、千百年の後より今日吾人が西洋を師と為したる有様を見たらば、千百年の以前、我先人が朝鮮に学びたるの趣に異なること無かるべし。然るに西洋の人は形体の事の外に、耶蘇宗教なるものを舶来して精神の師たらんことを企て、近年に至ては我国中に於ても少しく之を学ぶ者あるが如し。」

開国以来、日本は海外からの先進的な思想や技術を導入し、これら西洋諸国に追いつけ追い越せの政策を行ってきた。いわば西洋は近代の師である。しかし、それは形体の師であって精神の師ではない。西洋人はキリスト教を導入することで、精神の師ともなろうとしており、日本の中にもキリスト教を学ぼうとする者が出てきている。

「今日我国に於て耶蘇の教を学ぶ者は、西洋人の師恩を荷(にな)い、西洋諸国を以て精神の師と為す者なり。既に精神の師とあれば、その国百般の事物に就て之に心酔するは自然の理由にして、判断の明を失うなきを得ず。」

キリスト教を学ぶ者は自然と西洋の精神を師と仰ぐようになり、すべて西洋至上主義に陥ってしまうことになるだろう。したがって、キリスト教は国内に入れてはいけない。

「他国の宗教を輸入するに当り、その教の由て出たる本国に形体の権力あるものは、之を入れて害ありと明言して可なり。」

「我国の宗旨は古来仏法にして、中古に至るまでは、全国貴賤の別なく皆これを信じて、啻(ただ)に徳教のみならず、政治文学の事より工芸技術の末に至るまでも、苟(いやしく)も人文に関するものは悉皆仏者の手に在らざるなし。」

として、キリスト教の侵攻を防ぐべきは仏教であるとする[23]。福澤の排耶思想は複雑そうに見えて実は単純であるといえる。この時点での福澤の宗教観はまさに「和魂洋才」そのものである。西洋の政治、技術は取り入れるが、国の根幹となるべき部分は西洋に明け渡してはならない。日本の精神は、長く日本になじんできた仏教を中心とするべきだ、というのが彼の排耶思想なのである。

小結

アヘン戦争以後、日本でいえば幕末以後、今までの天主教(カトリック)とは趣を異にした耶蘇教（プロテスタント）がアジアに入ってきた。これに対して中国・日本は新しい対処法を考えなければならなかった。それは、一般庶民、宗教者ともに危機感を覚えるものであった。しかし、現状は耶蘇教自体の内容がよく理解されないまま、危機感だけが先行していった。真宗の僧侶を中心とする仏教陣営は、護法・護国を合言葉に新キリスト教に対抗を試み、両者の戦いは日増しに先鋭化していった。逆に一般庶民はこれを冷めた目で見つめ、格好の社会ネタとしてとらえていった。明治社会の先導者として社会、文化を導く立場にあった福澤諭吉は、西洋の優れた政治や文化を取り入れながらも、国民の精神的拠り所である宗教に関してはキリスト教を取り入れるべきではないという和魂洋才的立場を鮮明にし、新生明治日本の方向性を導き出した。この

三者の反応の差異にこそ、当時の日本社会の混沌さが見てとれる。

近代におけるプロテスタント侵攻をいかにとらえ、キリスト教に各国がいかに対処していったのかという問題は、それが現在社会の方向性に繋がるという点（例えば Pax Americana等）を考えるならば、アジアの近代をとらえ直す視点としてもっと注目するべき問題ではないかと考えられよう。

〔注〕

1．谷川穣「〈奇人〉佐田介石の近代」京都大学人文科学研究所『人文学報』第87号 2002年12月pp.84-85
2．福井純子「排耶というトレンド」『立命館大学人文科学研究所紀要』80号2002年 pp.169
3．原田健編『原田助日記』1971年
4．前掲福井論文に詳しい。
5．伊東多三郎『近世史の研究』1981年 吉川弘文館　第1冊pp.287-291
6．坂口満宏「幕末維新期の排耶論」
7．Liggins, John(1829～1912)米国聖公会から派遣されたプロテスタントの宣教師。日本における最初のプロテスタント宣教師とされている。
8．Williams, Channing Moore（1827～1910）中国名は維廉。米国聖公会の宣教師。日本聖公会初代主教。日本各地に複数の教会や学校を設立するなど、日本聖公会の発展に力を尽くした。
9．Verbeck（或いはVerbeek), Guido Herman（1830～1898）オランダの法学者・神学者・宣教師。米国オランダ各派教会から布教のため上海から長崎に派遣されたが、明治維新前の日本では宣教師として活動することができなかった。しばらくは私塾で英語などを教え生計を立てていたが、やがて幕府が長崎につくった長崎英語伝習所（フルベッキが在籍した当時は洋学所、済美館、広運館などと呼ばれた）の英語講師に採用された。佐賀藩主の鍋島直正等と親交があった。
10. Hepburn, James Curtis (1815～1911) 米国長老派教会系医療伝道宣教師であり、ヘボン式ローマ字の創始者。ペンシルベニア州ミルトン出身。江戸時代に来日。
11. 『大阪日報』1881年6月16日、『仏教雑誌』第39号（1881年6月21日）
12. 慶應義塾編『福澤諭吉書簡集』2001年 第4巻pp.348に「過日明治会堂を東本願寺に貸し仏教講談を催し大入なり。本願寺も近来は頻りに頼母子く思ふ様子にて、既に数日前彼の大法主なる人が親子同道にて拙宅へ挨拶に参候位の勢なり」

とあり、明治会堂を東本願寺に貸し出し、そこで仏教講談が開催され、大入りの盛況であったこと。最近の本願寺を頼もしく思っていることを告白している。

13. 前掲『福澤諭吉書簡集』第3巻pp.64～65
14. 前掲『福澤諭吉書簡集』第3巻pp.106
15. 前掲『福澤諭吉書簡集』第3巻pp.110～112
16. 前掲『福澤諭吉書簡集』第3巻pp.117～120
17. 『七一雑報』6-26（1881年7月1日）、『開導新聞』第96号（1881年6月27日）
18. 『大阪日報』1881年7月15日
19. 慶應義塾編『福澤諭吉全集』1960年 第8巻僧侶編 pp.31～34
20. 前掲『福澤諭吉全集』第8巻pp.31
21. 矢田績『福澤先生と自分』昭和8年2月 名古屋公衆圖書館　pp.20～21
22. 前掲『福澤先生と自分』pp.25～26
23. 前掲『福澤諭吉全集』第8巻時事小言 pp.169～183

※当時の新聞記事、雑誌記事については、ゼミ生渡辺陽子君の卒業論文制作過程での調査を使わせていただいた。ここに明記してお礼申し上げる次第である。